その昔　宮城野に鈴虫壇といふところあり

享保の頃、仙台藩の学者佐久間洞厳が著した「宮城野動植物十詠」には、「鶏、雲雀、鈴虫、寒蛍、萩、荻、藤袴、我裳香、女郎花、刈萱」の十種の動植物が詠まれています。鈴虫も上げられていますが、それと関連して現在の陸奥国分寺の東北、およそ五五〇メートルのところに、「鈴虫壇」の地名が近年まで残っていました。そこは姫塚とも呼ばれ、伊達藩時代には仙台城から姫君たちがゴザや緋毛氈を敷いて紫のまん幕を張り、野がけ弁当に舌つづみをうち、野点の茶を楽しみ、鈴虫の音を聞きながら秋の野花を摘んだりしました。壇の近くの小径は、鈴虫道と呼ばれ、昭和十年代までは九月下旬になると鈴虫の音が聞かれたと言われています。